



体育部会

体育部

体育科を通した意志をもっている姿

運動に対する課題を見付け、解決を目指して、自ら道筋をつけながら運動の行い方を工夫していく姿

視点 1

自らの学びをつなぐ

【その姿に向かうために】

- 各運動領域の系統性を意識した教材を選定したり、どの子も運動の特性に触れる楽しさや喜びを味わうことのできるルールや場の設定をしたりすることで、運動に関する知識や必要性と、基本的な動きや技能、解決すべき課題などを関連付けながら身に付けられるようにする。
- 運動を通して、「～できるようになりたい。」という思いを軸に単元を構成し、課題解決の学習過程を繰り返すことで、どの子も「分かった。」「できた。」という経験を積み上げ、次の学びに活用できるようにする。
- 運動の特性に迫る思考や動きを価値付け、何がうまくできて何がうまくいかなかったのか、動きや練習方法はどうかだったのかなどを振り返る場を設定することで、子ども自ら成果や課題を明確にし、見通しをもって学び進められるようにする。

視点 2

他者の学びを 自らの学びに つなぐ

【その姿に向かうために】

- 単元の中で場やルール、活動を意図的に変化させたり、得点などの数値や映像の提示をしたりする。そうすることで、運動を通して課題を把握し、色々な方法を試しながら自分なりの行い方を見付けたり、他者の力を得ながら自分の力で課題を解決したりできるようにする。
- 数値や目的などを基に、チームやグループを意図的に編成し、自他の動きや考えの差異点、共通点を明確にできるよう関わることで、一緒に活動したり、話し合いをしたりする相手を選択できるようにする。
- チームやグループの活動の際に、思考を共有できるツールを提示したり、見合いや教え合いのポイントを提示したりすることで、一人一人の動きや考えを共有できるようにして、仲間との協働を促す。

体育部の成果と課題

【令和7年度の体育部で目指した意志をもっている姿】

運動に対する課題を見付け、解決を目指して、自ら道筋をつ
けながら運動の行い方を工夫していく姿

次年度につなげていきたいことや方向性について

視点1 自らの学びをつなぐ

指導内容や評価機会・評価場面を

計画的に位置付けた単元構成

各運動領域の系統性を意識した教材の選定や、どの子も運動の特性に触れる楽しさや喜びを味わうことのできるようなルール、場の設定を行った。そうすることで、「分かった。」「できた。」という経験を積み上げるとともに、自分自身の運動に対する課題を見付け、運動の行い方やこつなどの知識を関連付けながら解決に向かう姿を生むことができた。

一方で、ルールや場の設定に留まることなく、単元全体を見通して、子どもが「どんな学びをつないでいくのか」ということについて、考えさせたいことや身に付けさせたいことを明確にした単元構成にしていく必要性も明らかになった。教材の選定、ルールや場の設定と合わせて、指導内容や評価機会・場面を計画的に位置付けた単元構成にしていく必要がある。そうすることが、自らの学びをつなぎ、資質・能力を育成していくことにつながると考える。

自ら道筋をつけるための運動の振り返りと

自覚を促す教師の関わり

何がうまくできて何がうまくいかなかったのか、運動に対するめあてや自分の動き、練習の場や作戦がどうだったのかなどを振り返る場を設定した。そうすることで、子ども自ら運動に対する成果や課題を明確にし、めあてを修正したり、練習の場や作戦を選択したりしながら見通しをもって学び進める姿が見られた。

しかし、動きとして表出される自分の運動が適切に把握できないことで、それに合っためあてや解決の見通しがもてない子どもも見られた。どの子も見通しをもって運動できるようにするには、見通しをもていない子どもへのめあての修正やできるようになるための具体的な提案、運動に対する即時的な価値付けやフィードバックなどの自覚を促す関わりが必要である。それにより、自ら道筋をつけながら運動する姿が連続していくと考える。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

意図的なチームやグループの編成と

差異点や共通点を明確にする教師の関わり

運動を通して他者の動きや課題解決の方法を学びとることができるように、数値や目的などを基に意図的にチームやグループを編成した。それにより、自分の動きと友達の動きを比較しながら、自分とは違う視点を取り入れている他者と関わったり、グループ内で自分のめあてを確認したりしながら運動に取り組む姿が見られた。

しかし、「他者の学び」というものが自分のチームやグループの数人で留まってしまうことになり、あまり広がりが見られなかったとも言える。他のチームやグループの運動にも目が向くようなチーム編成やグループ設定を吟味するとともに、各グループの活動や思考を適切に見取り、差異点や共通点を明確にできるよう関わる必要がある。そうすることが、目的をもって他者に向かい、体育ならではの動きの言語化や動きを通した非言語の対話につながり、運動を通して新たな気づきが得られるようになると考える。

他者と学ぶ価値を自覚できる学び方の構築

チームやグループでの活動の際に、ホワイトボードなど思考を共有できるツールを提示したり、見合いや教え合いのポイントを提示したりした。そうすることで、他者の運動に関わる視点やチームで考えたいこと、作戦についての動きなどを可視化し、他者と共有しながら運動していく姿につながった。解決の仕方や取り組む場、動きの変容を見取ることができた一方で、他者から何をどのように学びとったことで自分の動きや運動が変容しているかについてまでは振り返ることができていない。子どもが自ら道筋をつけて運動するために他者の存在は欠かせないからこそ、他者と学んだことによる自分自身の運動の変化についても自覚できるような振り返りや学び方の構築が必要になる。そうすることで、より主体的に学び進める個や集団を育成できると考える。

【本単元で目指す意志をもっている姿とその理由】

技の達成に向けて、自己の能力に適した課題を見付け、解決のためにめあてを更新しながら運動している姿

器械運動では、体の支持や回転など非日常的な動きを含んだ運動を行い、技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりする楽しさや喜びに触れることができる。しかし、技への挑戦に恐怖感を抱いたり、技の「できる」「できない」が自他ともにはっきりとしてしまうことで苦手意識が生じたりすることがある。そこで、本単元では、技に挑戦する際に、自己の能力に適した課題を見付け、解決するための動きや取り組む場などについて自分のめあてをもって、学習に向かえるよう単元を構成した。それにより、課題と解決の仕方が明確になり、授業の終末に学習を振り返られるようにすることで、次時の学習を方向付けたり、新たな挑戦意欲につなげたりして、技の達成に向けてめあてを更新しながら運動に取り組む姿が生まれると考えた。また、そのような意志をもっている姿を、単元を通して生むことが、挑戦を続け運動をより豊かにしようとする姿勢につながる。

【単元の目標】

- ・跳び箱運動の行い方を理解するとともに、自己の能力に適した切り返し系や回転系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったりすることができるようにする。【知識及び技能】
- ・自己の能力に適した課題と自分のめあてをもって解決の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の動きについて分かったことや考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
- ・跳び箱運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

視点1 自らの学びをつなぐ

技の達成を目指しためあての更新と成果の自覚

技の達成に向かう際に、行う技だけでなく段数や踏切り調整板の距離で段階を数値化することで、自己の能力に適した課題を見付けられるようにする。さらに、技の行い方やこつなどの知識を基に、見付けた課題に対する自分のめあてや、解決の見通しをもって技に取り組み、学習の成果を振り返るというサイクルを繰り返す単元構成にする。そうすることで、次時の学習を方向付けたり、新たな挑戦意欲につなげたりして、めあてを更新し続けながら運動に取り組む姿をねらう。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

技ごとのグループ編成と体育ならではの表現の活用

本時では、子どもが選択した技ごとのグループを編成し、グループ内で自分のめあてを確認してから運動に取り組めるようにする。そうすることで、技のこつと自分の動き、友達の動きとを比較しながら見合ったり伝え合ったりすることができるようにする。その際、オノマトペを用いた動きの言語化や動きを通した非言語の対話など、体育ならではの表現を生かした対話を促すことで、技の達成に向けた課題に対して、動きを通した新たな気づきが得られるようになると考えた。

【単元構成（6時間扱い）】

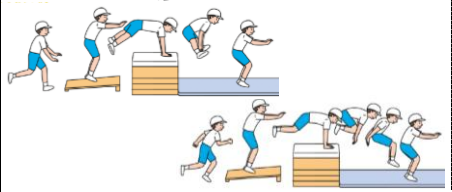
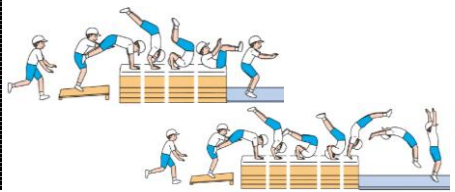
1時間目	2・3時間目	4・5時間目	6時間目（本時）
切り返し系や回転系の技ができるようになるためには、どんな体の動きや場で取り組むといいかな？			
自分に合った、切り返し系や回転系の技に挑戦してできるようにしよう！ 開脚跳びは、踏切り・着手・着地を、トン・パン・ドンでやるといいね。 着地は、ピタッ・1・2・3で止められたら技ができていえるね。 台上前転は、ドン・クルン・フワッとなるようにスムーズに回転するよ。 首はね跳びは、くの字の姿勢から一気にはね動作と突き放してピョンと跳ぶよ。ステージからの首はね下りで確かめよう。 できる技を増やしたり、高さが変わってもできるようにしたりしたい。 切り返し系や回転系の基本的な技を確かめて、今の自分にできる技やできそうな技が分かったよ。	切り返し系 ●開脚跳び  ◆かかえ込み跳び  開脚跳びは5段まで跳ぶことができるよ。もっと高い段でも跳び越せるようにしたいな。 高い段も跳び越せるようにするには、踏切りを強くするといいいね。 トン・パン・ドンだけでなく、突き放しのときは、手でジャンプをするようにするといいいよ。 切り返し系や回転系の技の行い方やそのこつ、課題を解決するための動きや場が分かったよ。自分に合った技に挑戦して、技ができるようになりたいな。 開脚跳びの6段 60 cmが跳べるようにしたい。40 cmは跳べるから、より遠くに跳べるようにすることが課題だな。そのためには、今より手を遠くに着くことが必要だ。	回転系 ●台上前転 ◆伸膝台上前転  ●首はね跳び ◆頭はね跳び  台上前転ができないから、できるようにしたいな。 両足で強く踏み切って、手は手前に着き、腰を上げて首はへそを見るようにして回るといいよ。 まずはマットを重ねた場で前転をして、真っ直ぐ回ることができるかを確かめよう。	自分に合った技ができるようになるには、どうしたらいいかな？ 目印のラインを目掛けて、手を遠くに着くようにして跳んでみよう。 手を遠くに着くだけでなく、肩をグーッと前に出すようにすると、跳び越すことができたよ。 1段低い跳び箱から前転をして回りきれるようにするよ。 踏切りをドンと強くして、腰を高く上げるといいことが分かって、回りきることができたよ。 体の動きや取り組む場を工夫したり、こつや分かったことを伝えたりして、技ができるようになったよ。 跳び箱週間 マット運動

【本時の目標】

自己の能力に適した課題と解決に向けた自分のめあてをもって技に取り組む活動を通して、自他の運動を比較しながら技のこつや動きの違いを見付け、自己やグループの仲間の動きについて分かったことや考えたことを他者に伝えることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

【本時の展開】（6/6）

子どもの意識と活動	つながっている学び	教師の意図とかかわり
＜前時まで＞ 開脚跳びやかかえ込み跳びといった切り返し系の技、台上前転や首はね跳びといった回転系の基本的な技の行い方やそのこつ、課題を解決するための動きや場を理解して運動に取り組んでいる。また、「技ができるようになりたい。」という思いをもち、行う技や段数・距離といった段階を決め、自己の能力に適した課題を見付け、自分のめあてや課題解決の仕方についての見通しをもっている。		
○準備活動（挨拶、場や器械・器具の準備、主運動につながる運動） 自分に合った切り返し系や回転系の技に挑戦しよう！		
○めあての確認	自分の課題とめあて 技のこつと解決のための場	前時までに積み上げてきた技のこつや運動の場と結び付けながら解決に向かえるように、行う技や段数・距離といった段階、自分のめあてや課題解決の仕方についての見通しなどを確認する活動を設定する。 （視点1）
開脚跳びの6段 60 cmが跳べるようにしたい。40 cmはできるから、より遠くに跳べるように手を遠くに着いて突き放そう。 台上前転で回転して着地までできるようにしたい。腰が上がるように、1段低い跳び箱から前転をして下りる練習をしよう。		
自分に合った技ができるようにするには、どうしたらいいかな？		
○グループに分かれての運動		
切り返し系  回転系 	技のこつと自他の動き オノマトペを用いた動きの言語化 動きを通した非言語の対話 解決の場	行いたい技が同じ子ども同士でグループを編成することで、技のこつと自分の動き、友達の動きとを比較しながら見合ったり伝え合ったりすることができるようにし、動きを通して新たな気づきが得られるようにする。 （視点2）
目印のラインを目掛けて、手を遠くに着くようにして跳んでみるよ。手の着く位置を見てね。		
1段低い跳び箱から前転をして、回りきれないようにするよ。着地まで回れているか見てね。		
手を遠くに着くことはできていたよ。もっと肩をグーっと前に出すようにするといいね。		
着地までできていたよ。踏切りを強くして今くらい腰を上げれば台上前転ができそうだね。		
肩をグーっと前に出すように体重移動をして突き放すことが必要だと分かったよ。	解決の場	挑戦している技ができるようになるために、どういう体の動きをしたのか、どんな場で取り組んだのか、どんな気づきがあったのかなど、自分のめあてに対する成果を振り返られるようにすることで、自己の学習の成果を自覚できるようにする。 （視点1）
台上前転をするには、踏切りをドンと強くして腰を高く上げることが大切だと分かったよ。		
体の動きや取り組む場を工夫したり、こつや分かったことを伝えたりして、技ができるようになったよ。		
○運動の振り返り		
遠くに手を着いて、それよりも前に肩を出すように体重移動したことで、開脚跳びの6段 60cm が跳べるようになった。	1段低い跳び箱から前転をして下りる練習で、どれくらい腰を上げるといいかが分かって、台上前転ができるようになった。	
○整理運動、場や器械・器具の片付け、挨拶		

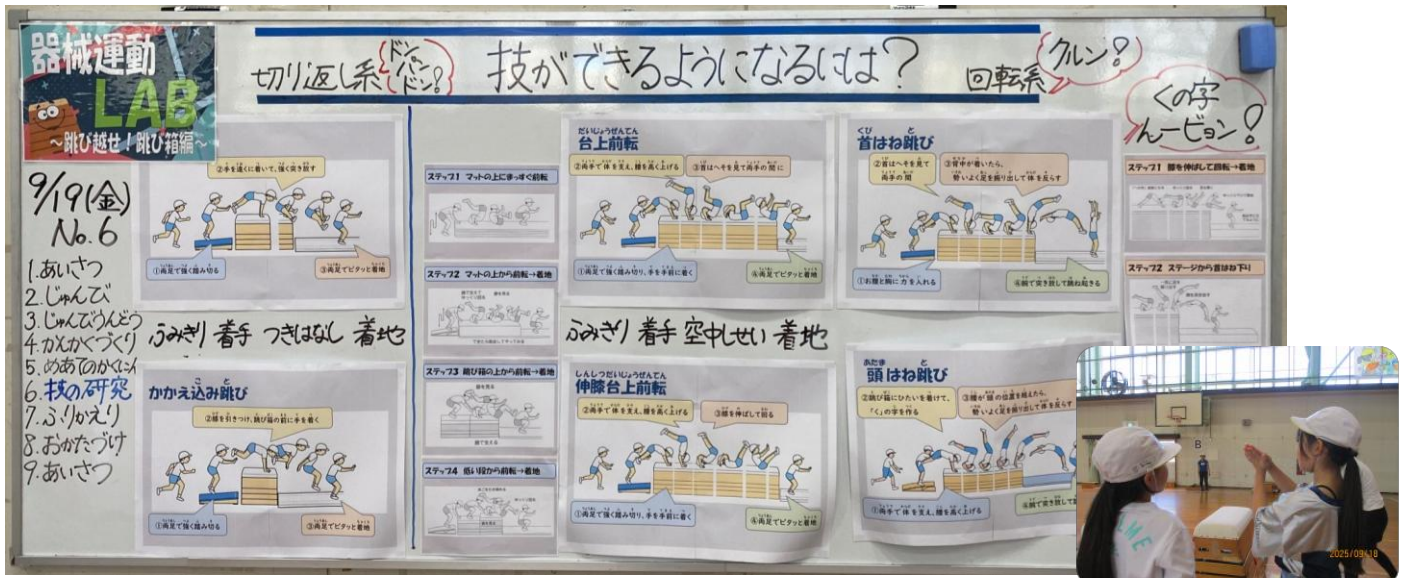
【本時の評価】

自己の能力に適した切り返し系や回転系の技を達成するために、自他の運動の比較から見付けたこつや動きの違いを基に、自己やグループの仲間の動きについて分かったことや考えたことを、動きや言葉でグループの仲間に伝えている。

（行動観察・学習カード）

授業後の振り返り

【本時の板書】



視点1 自らの学びをつなぐ

【成果】

- 行う技だけでなく段数や踏切り調整板の距離で段階を数値化したことで、自己の能力に適した課題（踏切り・着手・空中姿勢・着地）を見付け、技の達成に向けて運動に取り組む姿が見られた。
- 技の行い方やこつなどの知識を基に、見付けた課題に対する自分のめあて、取り組む場や必要となる動きなど課題解決の仕方についての見通しをもって技に取り組み、学習の成果を振り返るというサイクルを繰り返す単元構成により、「首はね跳びをできるようにするために、強く押し出して跳ねる動きが必要だから、ステージの場で跳ねる練習をする。」といった課題と解決の仕方を明確にし、めあてを更新しながら運動に取り組むという意識をもった姿が見られた。
- グループで見合うことで1回ごとの運動に他者からの評価があることや、Padlet を活用した振り返り（行う技・めあて・めあての達成度・めあての振り返り）と動画記録によって、子ども自身が学習の成果を実感し、学びのつながりを自覚することにつながった。

【課題】

- 課題を見付け、めあてを更新しながら運動に取り組むサイクルが進めたが、適切な課題が見付けられていない子や、課題に対するめあてにズレがある子も見られた。そういった子を見取り、めあてを修正したり、課題解決の仕方について具体的に提案したりする関わりや運動補助をすることで、技能的な側面を補うことにつながったと考える。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

【成果】

- 子どもが選択した技や段数・距離といった段階ごとのグループを編成したことで、技の達成に向けた目的意識をもち、単元の中で獲得してきた技のこつと自分の動き、友達の動きとを比較しながら互いに見合ったり伝え合ったりして学び進める姿が見られた。
- グループで学び進める際に、オノマトペを用いた動きの言語化や動きを通した非言語の対話など、体育ならではの表現を生かした対話を促したことで、運動を通して技のこつや動きについての新たな気づきを他者から得たり、自らの学びをアウトプットしたりすることができていた。

【課題】

- 選択した技ごとのグループ編成は有効だったが、見合ったり伝え合ったりする「学び方」については、より高度なものを求められると明らかになった。課題（踏切り・着手・空中姿勢・着地）によって技の見る位置（正面・横など）を変えるように指導することで、見合ったり伝え合ったりするグループでの関わりの際に、より適切なフィードバックにつながったのではないかな。
- 一部の子は行っていたものの、グループ以外の場へできていない子が自ら聞きに行く、できている子が手本を見せに行くなどの往来までは見られなかった。フィードバックに対する価値付けや、他グループの子へつなぐ関わりをすることで、他者の学びが自らの学びにつながったことの価値の自覚を促すことができたと考える。

【本単元で目指す意志をもっている姿とその理由】

攻撃の課題を見付け、味方や守備者の動きを基にパスやシュートに有効な空間に気付किながら運動している姿

ゴール型ゲームでは、ボール操作とボールを持たないときの動きによって攻撃を組み立て、競い合う楽しさを味わうことができる。一方で、常にゲーム状況の判断を前提にしながら運動技能を発揮しなければならず、それに加えて「味方」「守備者」「ゴール」と意識する対象が多く、ゲームの中で意図的に動きを選択することに難しさがある。そこで、本単元では、360度全方位がシュート空間であるセストボールを扱うことで、ゲーム状況において意識する対象を「味方」と「守備者」に限定し、ボールを運びシュートチャンスをつくる局面における攻撃の課題に気付き、チームで攻撃を組み立てる戦術学習を展開した。そうすることで、パスやシュートに有効な空間を見付けながら攻め方を工夫する姿が生まれると考えた。そのような意志をもっている姿を、単元を通して生むことが、ゲーム状況を判断しながら意図的な動きでシュートチャンスを創り出そうとする姿につながる。

【単元の目標】

- ・セストボールの行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすることができるようにする。【知識及び技能】
- ・攻撃の課題を見付け、簡単な作戦（攻め方）を選ぶとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
- ・セストボールに進んで取り組み、規則を守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

視点1 自らの学びをつなぐ

フリーを生かす動きに着目した単元構成と振り返り

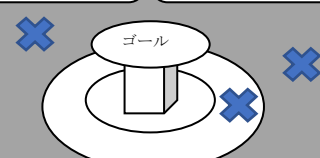
本単元では、フリーの味方にパスすることや、ボールを持っていない時にフリーになる動きを大切にする。作戦（攻め方）の動きやその攻め方のよさを板書に位置付けることで、味方や守備者の位置を基にパスやシュートに有効な空間に気付けるようにする。また、チームで選んだ作戦（攻め方）やそのための自己の動き方について考えたことを振り返る場を設定することで、次時に作戦（攻め方）を選び直したり、選んだ作戦をよりよくしたりしようとする思いをもつことができるようにする。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

全員得点を目指すルールと作戦タイムでの動きの共有

単元を通して、チームの全員が得点するとボーナス点が入るルールを設定した。そうすることで、チームの全員が得点する意識が生まれると考える。また、これまでに出てきた作戦（攻め方）のよさや適したチーム像を板書に位置付け、チームの動きを可視化できるボードを用意した。本時では、それらを基に自分たちのチームの課題やよさに応じて作戦を選び、考えを共有することで、チームの全員が得点するために、他者の動き方や工夫を取り入れながら学びを深められるようにする。

【単元構成（6時間扱い）】

1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目（本時）	6 時間目
どうしたら「パストボール」でたくさん得点できるかな？					
パストボールをやってみよう！	守りのゾーンのあるゲームをして、たくさん得点しよう！		オールコートでゲームで、仲間と協力してたくさん得点できる攻め方を考えよう！		
タグラグビーと違ってパスだけで前に進んでゴールを目指すんだね。	ふわっとパスをするとキャッチしやすいよ。	「フリー」がいなくてパスができないよ。	新しいルールのゲームも分かったよ。	パスをつないで得点するには、どの作戦でどのように動くといいかな？	作戦がうまくいくにはどうしたらいいかな？
タグラグビーと同じで、手をおにぎりの形にしてキャッチするよ。 おにぎりキャッチ！			フリーだと思ってパスをしても、ジャマーに取られちゃうよ。	ジグザグパスでジャマーを間に入れないようにしましょう。	ジグザグパスでどっちにもパスできるように、左右分かれるようにしましょう。
シュートやパスもおにぎりの手のまま、胸から投げるよ。 おにぎりビーム！	ミニゲームでチームの動きを確認しながらやろう。	「フリー」をつくる動きをしないとイケないね。	パスがうまくつながらなくてゴールまでたどりつけないよ。	ロングパス作戦をするために、スタートした瞬間すぐ前に走ろう。	ロングパス作戦はキャッチが難しいからもう少し近くしよう。
「おにぎりキャッチ」と「おにぎりビーム」でパスをつなぐとシュートまですることができたよ！	「フリー」の味方を見付けて、パスすることが大事だね。	ボールを持っていない人が動いて、「フリー」をつくるのが大事な。	「フリー」をつかってパスをつなげたいのに、うまくいかないな。	フリーでパスをつなげる場所を探すといいね。	どんな作戦でも「フリー」を作ることが大切だね。
	「フリー」を見付けてパスをしたり、フリーになるために動いたりすることでパスをつないで得点できたね。			チームで作戦（攻め方）を選んで、どのように動くといいかを考えることができた。	チームの作戦を成功させるためにどう動くといいか伝えながらゲームできたよ。

【本時の目標】

オールコートゲームでパスをつなぐための動き方を考える活動を通して、パスやシュートに有効な空間があることに気づき、そのための作戦（攻め方）を選ぶことができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

【本時の展開】（５／６）

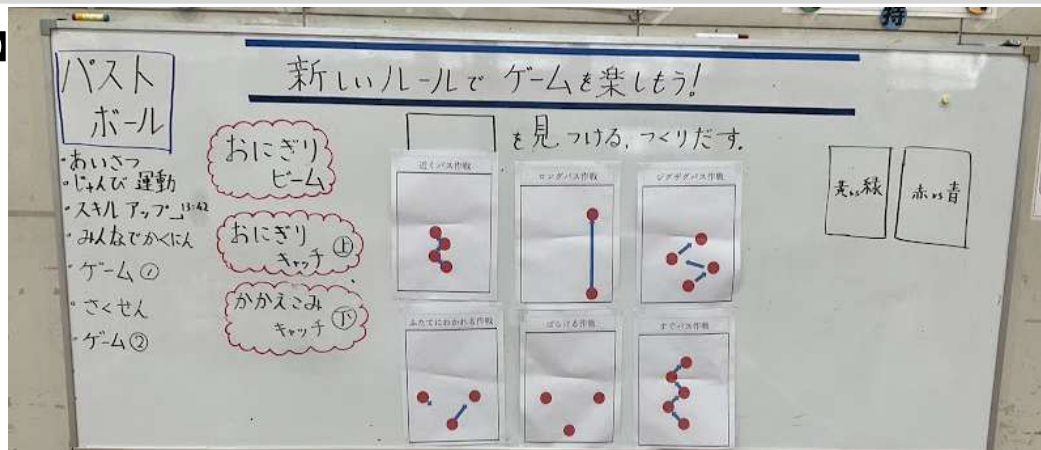
子どもの意識と活動	つながっている学び	教師の意図とかかわり
＜前時まで＞ 守備者の動ける範囲に制限があるゲームを通して、ボール保持者と自分の間に守備者がいないフリーの人にパスをするとよいこと、パスをつなぐためには、ボールを持たないときにフリーをつくるような動きをしなければいけないことを理解している。前時では、守備者の動ける範囲の制限がなくなったことで、相手に守られてゴールまでつながらなかったり、パスを取られたりすることが多くなり、パスをつないでシュートに持ち込むことが難しいという攻めにくさを感じている。		
○準備活動（挨拶、準備運動、主運動につながる運動） パスをつないで得点するには、どの作戦でどのように動くといいかな？ ○作戦タイム ジグザグパスでジャマーを間に入れないようにしよう。 自分はキャッチが苦手だから、近くでパス作戦がいいな。 遠くにパス作戦は、投げるのが得意な人ならできそうだね。 いつでもフリーになれるように、ジャマーの位置を見ながら動くようにしよう。  ロングパス作戦をするために、スタートした瞬間すぐ前に走ろう。 守りとズレができる動きをしたり、空いているスペースを使ったりしよう。  キャッチが苦手な人が多いから、近くまでパスをもらいに動こう。 ボールを持っているときはフリーを探して、持っていないときはフリーになるように動こう。 自分のチームの投げる力やキャッチの得意・不得意によって、作戦が変わるね。	作戦のよさと動き方	グリットゲームとオールコートゲームの得点数を提示することで、守りに止められずにパスをつなぐための作戦（攻め方）を工夫しようとする思いを引き出す。 チーム全員が得点するとボーナス点が入るルールを設定することで、チーム全員がパスをつないだり得点したりできるような作戦（攻め方）を選び、そのための自己の動き方を確認できるようにする。 （視点２）
○ゲーム 守りから離れる、守りが味方との間にいないよう動くよ。ここが空いている。 ジャマーが近くにいないフリーの味方を見つけてパスをするよ。 ジャマーが手前にいるから、ゴールに向かって走るよ。前にパスを出して。 チームで作戦（攻め方）を選んで、どのように動くといいかを考えることができたよ。 ○運動の振り返り ジグザグパスで、守りの動きに合わせて自分の動き方も変えるとフリーになれた。 味方の位置と守りの動きを見て、パスやシュートにつなげられた。 ロングパス作戦で、前に走るようにしたらパスがつながってシュートできた。 ○整理運動、挨拶	ボール操作 ボールを持たないときの動き	作戦（攻め方）の動き方やその攻め方のよさを板書に位置付けることで、見方や守備者の位置を基にフリーをつくり、パスやシュートに有効な空間に気付けるようにする。 （視点１） チームで選んだ作戦（攻め方）やそのための自己の動き方について考えたことを振り返る場を設定することで、次時に作戦（攻め方）を選び直したり、選んだ作戦をよりよくしたりしようとする思いをもつことができるようにする。 （視点１）

【本時の評価】

オールコートゲームでパスをつなぐために、パスやシュートに有効な空間を見付けることができるような作戦（攻め方）を選んでいる。
（行動観察・グループボード・学習カード）

授業後の振り返り

【本時の板書】



視点1 自らの学びをつなぐ

【成果】

- 2年生で取り組んだボール投げ運動遊びにおける「フリーを見つけて動く」という学びを生かし、本単元では、ボールを持っている時にはフリーの味方にパスを出し、ボールを持っていない時にはフリーになれる場所へ動いてパスをもらおうとする姿が見られた。2年生からの学びをつなぎ、判断と動きを発展させることができていた。
- フリーの味方にパスすることや、ボールを持っていない時にフリーになる動きを大切にした単元構成を行った。その結果、子どもたちは、味方や守備者の位置を見ながら、パスやシュートに有効な空間に気付いて運動する姿を見せるようになった。

【課題】

- 360度全方位がシュート空間となるセストボールを扱うことで、他のゴール型ゲーム以上に「フリー」を意識して運動できる単元構成としたが、シュート後に兄弟チームと交代するルールや活動時間の短さ、チーム編成の不均衡さなどにより、セストボールの特性を十分に生かすことができなかった。その結果、ゴール周辺での「フリー」に対する意識が弱くなり、シュート局面において十分に判断し、得点につなげるまでには至らなかった。ルールや活動時間を再考するとともに、オールコートでのゲームから始めるのではなく、ゴール周辺のみ、次にハーフコート、最後にオールコートへと段階的に場を設定することで、シュート局面においても「フリー」に目を向けながら考えて運動する経験を積み重ねられるようにし、自らの学びを次の動きへとつなげる価値がより高まるのではない。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

【成果】

- 単元を通して、チームの全員が得点するとボーナス点が入るルールを設定したことで、チームの全員が得点することを意識してゲームに取り組む姿が見られた。得点する人が偏らないように声を掛けたり、得意・不得意にかかわらずシュートの機会をつくろうとしたりするなど、チームとしての課題意識をもって活動することができていた。

【課題】

- 作戦タイムとしてチームに合った作戦を選ぶことを設定したが、3年生にとっては、自分たちのチームの課題を把握し、その解決のために自分がどのように動くかを考え、さらにチームとしての作戦を決定するのは難しかった。その結果、課題を理解できる児童が自分の能力を基に考えを進めてしまったり、運動が苦手な児童が活動を楽しめなかったりする場面が見られ、全員が楽しむための作戦を考えるという視点が十分に共有されなかった。「チームのみんなが楽しく得点するために、自分はどう動くか」「仲間にはどのように動いてほしいか」を伝え合う学習に重点を置くことで、仲間の考えや動きから学び取ろうとする意識が高まり、チーム内での気付きや工夫を互いに生かし合う学びへとつながっていくのではない。
- チームの動きや作戦を可視化するためにボードを用意したが、ボード上で自分の動きをイメージし、表現することは難しさがあった。その結果、作戦や仲間の動きを基に自分の動きを考えるまでには至らなかった。作戦を「選ぶ」ためのボードではなく、「自分はどう動くか」「仲間にどう動いてほしいか」を伝えるためのボードとして活用するとともに、板書に示していた情報をボード上にも反映させることで、仲間の考えやチームの特徴を手掛かりに自分の動きを想像しやすくなり、他者の学びを自らの学びへとつなげる価値がより生まれるのではない。